

群馬県立館林女子高校「女性の生き方探究」

# SDGs Boot Camp

Report 2020

## はじめに

館林女子高等学校の総合的な探究の時間「女性学」の開始当初より、立命館大学の学生と協力し取り組みを進めてきました。普段の授業、さらには、昨年度に開催したSDGsスタディーツアーなど、群馬と滋賀・京都と離れた地でありながら、大学生と高校生が共に学ぶ実践例として、様々な活動を行っています。

今回のSDGs Boot Campは、コロナ禍により開催を危ぶまれましたが、オンラインを活用したレクチャー、ワークショップ、発表会を行いました。これらの活動は、まさにオンラインを活用したニューノーマルな学びにチャレンジしたと言えるのではないのでしょうか。

このようなコロナ禍の状況で、私たちが変わらないといけないのか、コロナ禍以前の社会に戻ることを求めるのかという点で、「持続可能な社会」について誰もが考えるきっかけとなったと感じています。

SDGs Boot Campで高校生の皆さんが学んだ小論文の書き方は、自分の考えを表現する1つの方法として、大切にしたいと思っています。

最後に、この取り組みを行うにあたり、三菱みらい育成財団に採択いただきご支援いただいたこと、ご協力いただいた館林女子高校の先生方、立命館大学の学生の皆さんに心から感謝申し上げます。

館林女子高等学校  
女性学実行委員会アドバイザー  
上田 隼也

## もくじ

- P.2 はじめに
- P.3 もくじ
- P.4 群馬県立館林女子高校  
「女性の生き方探究」について
- P.5 SDGs Boot Camp プログラム概要
- P.6-7 小論文要約紹介
- P.8-9 アンケート・受講生の声
- p.10 講評
- p.11 おわりに

## 群馬県立館林女子高校 「女性の生き方探究」

創立103年目の伝統ある県立女子高校の特色を生かし、独自に立ち上げた教育プログラム。SDGsの目標5「ジェンダー平等と女性のエンパワーメント」を基礎として学び、その視点を踏まえてSDGs全ての目標の課題解決を目指す探究学習です。授業内では、有識者による講演会や読書会、市民講座や高校周辺の中学校への出前授業などを行っています。

### 女性学実行委員会

女性学の授業を受けて、もっと深く、実践的に学びたい意欲のある生徒が主体的に授業を運営する組織。SDGsに取り組む大学生や、大人の方と連携しながら、SDGsリーダーとなるためのマインドやスキルを積極的に身につけ、授業運営やマイプロジェクトに取り組んでいます。

### SDGs

SDGs(持続可能な開発目標：Sustainable Development Goals)とは、環境や貧困と行った人類共通の課題解決にむけた、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標です。これは「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」の具体的な行動指針であり、地球上の「誰一人取り残さない」をスローガンとして、2015年9月の国連サミットで全会一致で採択されました。

# 社会を変えるアイデアをカタチに SDGs Boot Camp

今年度行ったSDGs Boot Campでは、野村総合研究所主催のNRI学生小論文コンテスト2020への応募をゴールとし、小論文の書き方やアイデアの整理法などをワークショップを通じて学びます。応募するにあたり、立命館大学Sustainable Week実行委員会のSDGsに取り組む大学生による小論文作成のサポートを行いました。コロナ禍のため、ほとんどのレクチャーやサポートをオンライン会議ツールを用いて実施しました。

## 開催概要

期間	2020年8月-11月
場所	オンライン、群馬県立館林女子高校
主催	群馬県立館林女子高校 女性学実行委員会
運営	一般社団法人SDGs Impact Laboratory
協力	立命館大学 Sustainable Week 実行委員会



## 全体スケジュール

2020.8.12 START!

小論文講座・システム思考ワークショップ実施

8.31

中間発表会・フィードバック

9.11

NRI小論文コンテストへ提出

10.26

デザイン・プレゼン講座実施

11.13 GOAL!

成果発表会

## 小論文講座

講師 | 山中 司 (立命館大学 生命科学部教授)

「小論文とは何か。」というテーマから、小論文の評価されるポイントなどをレクチャー。実際に、仮のテーマで小論文を書き、フィードバックをしながら具体的なアドバイスをいただきました。

## システム思考ワークショップ

講師 | 上田 隼也 (一般社団法人 SDGs Impact Laboratory 代表理事)

自分自身の課題意識と、社会課題を結びつけアイデアを生み出すためのワークショップ。SDGsや社会課題を自分ごとに捉え、小論文のテーマの方向性を決めることができました。

## 伝えるデザイン・伝えるプレゼン講座

講師 | 吉武 莞 (一般社団法人 SDGs Impact Laboratory デザイナー)

作成した小論文を発表する際に必要なスキルとして、パワーポイントの作成や発表のコツなどをレクチャー。プログラム内だけでなく将来に役立つスキルを身につけることができました。

# 私たちが実現したい理想の社会

SDGs Boot Campに参加した高校生・大学生が書いた小論文の要約を紹介します。



館林女子高校 2年 丸山友彩

## 全ての子供達が平等な教育を受けられる環境がある社会

私の考える最適な社会とは、全ての子供が平等な教育を受けられる環境がある社会だ。なぜなら現在、差別や偏見が苦しくて学校に行けない子供や貧しくて毎日ギリギリの生活をしている子供など、将来安定した職につくことが出来なくなる可能性が非常に高い子供が沢山いるからだ。その為には、一人一人が自分の発言や言動が正しいのかを考え、時々相手に自分の発言があっているか確認し、必ず相手の悪い所を言ったら良い所も言うことが大切だ。また、自分の意見と反対の意見も考えてみるのが大事だ。

また、小論文には書けなかったが、会議が開けるような空間や相談が出来るカウンセラーがいる施設の設置や募金活動も大事だと考える。



館林女子高校 2年 山本唯愛

## 性別や感情に左右されず平等な評価を得られる社会へ

～AIによる人事評価「Help VALUATION」の導入～

持続可能な社会を実現するためには、能力を男女関係なく正当・平等に評価し、力を最大限に活用することが必要であると考えている。だが、自分自身の経験からも、点数化できないものの評価は難しく、日本の人事評価において、評価に関して不満を抱いている人は多い。ここで正当・平等に評価しやすくするため私が提案するのは、「Help VALUATION」というAIによる人事評価の導入だ。

「Help VALUATION」には、それぞれの能力を明確にする機能と、点数化できない部分の評価を、3段階の基準を定め公平に評価する機能がある。



館林女子高校 1年 高橋柚葵

## 左利き共有プロジェクト -深刻な問題を知ってもらうために-

昔、左利きに対しての偏見がひどく、左利きは悪いもの、矯正すべきものとして扱われ、自分の手が左利きだとしてもその意味はほとんど尊重されず強制的に矯正させられた。特に箸、ハサミなどが挙げられる。このような深刻な問題を減らすためにも「左利き共有プロジェクト」を提案する。このプロジェクトで多くの人に少しのことで知ってもらう為に、困難さをインターネットを通じて日本だけではなく世界に発信し、その左利きが困難だということを共有してもらいそして、改めて左利きについて考えて貰ったり、左利きはこんなにも大変な思いをして生活していること、この世界が右利きの世界になっている事などを意識しながら生活してもらいたいと考えている。



館林女子高校 1年 宗像まみ

## 性的マイノリティの人たちが利用しやすい公共トイレについて

LGBTQや性的少数者などのマイノリティの人たちの情報が増え一般理解が増えている中でトイレなどの公共施設はそのことに対応しているとは言えない。その中で学校、オフィス、大型ショッピングセンターなどのトイレに男性用トイレ、女性用トイレ、男女兼用トイレを設置する。男女兼用トイレなら混雑などを理由にカミングアウトにならないで比較的入りやすい。このようなマイノリティの人たちが暮らしやすい社会を実現する。



館林女子高校 1年 佐藤小波・澁澤ももこ

## 別学と共学 そして私たちが提案する第三の学校

私たちが考える最適な社会は男だから女だからという固定概念がない社会だ。まだ日本ではジェンダー問題の関心や知名度が高くない。まずジェンダー問題について考えるため、中でも私たちの身近なものでもある教育におけるジェンダー問題や男女別学、共学について興味を持った。

別学共学ともにメリットデメリットがあり、その両方のメリットを組み合わせ、補い合うことは出来ないのかと考えた。そこで私たちは、別学共学両方のメリットを取り入れた今までの形には無かった第三の学校を提案する。



立命館大学 工学部4回生 岸本俊輝  
立命館大学 経済学部1回生 中島 綾香

## サステナブルな組織 ～働く方々全員が成長を実感するために～

VUCA時代において、「働きがい」を感じられるようにするには、個人のやりたいことと仕事をうまく結びつけられる環境を用意する必要があるのではないかと。そこで、「働きがい」に着目し、実際に企業が行っている仕組みや制度を踏まえて、「共感した人と共創するワーキング・グループ制度」の導入を提案する。

この制度は、情報の可視化・人事改革・新たな評価制度を企業に推進していくことで、人と人が「共感」で繋がりがやすくなるだけでなく、組織文化を社員に浸透させる取り組みである。このような環境を用意することで、サステナブルな組織を生み出し、これからの未来を担う働く方々全員が成長を実感できる社会を実現する。



立命館大学 文学部4回生 高島千聖  
立命館大学 食マネジメント学部2回生 豊田真彩

## 食を通じた地域コミュニティ創生 —江戸時代にみる循環型社会—

私たちが定義する最適社会は、「見える繋がりが取り戻された社会」である。SNSやグローバル化などの見えない繋がりが普及した一方で、食と農の乖離や、地域コミュニティの希薄化など、見える繋がりが失われていることに課題意識を持っているからだ。そこで、江戸時代の循環型社会を参考にして、コンポストを利用した循環型地域コミュニティの創生を提案する。家庭でコンポストを行い、地域のコミュニティファームで堆肥を活用し、野菜を育てる。これはフードロスやCO2の削減、多世代への食農教育、身体的・精神的・社会的健康の促進に寄与できる。このように農業を通じて、資源と地域コミュニティをサステナブルにすることが出来るのだ。



立命館大学 生命科学部4回生 中西優奈  
立命館大学 食マネジメント学部1回生 佐藤彩香

## Biwacology -働きながら地域と関われるサステナブルなアイデア-

滋賀県で地域活性の活動に関わる中で、就職を機会に地域活動に関わることができなくなり、若者が地域から流出してしまうことに課題を感じた。そこで、私たちは働きながら地域と関われるサステナブルなアイデアとして「Biwacology」という新たな働き方を考えた。その働き方を実現するために、企業・教育期間・自治体が連携して地域の小中学校の部活動や授業をつくる教育システムを提案する。このシステムでは、ICTの活用によるテレワークの普及を軸に新たな教育に資する地域活動を行う。このシステムを実現することで、様々な地域課題の解決にもつながることが期待できる。このシステムを滋賀県で実践することで私たちに、活動してきた地域と関わりながら働ける社会を実現することを目指したい。

# アンケート結果

プログラム終了後に、プログラム受講者12名（高校生6名、大学生6名）を対象に、プログラムを通して身についたスキルや、満足度・成長度についてのアンケートを実施しました。

## 身についたスキル

プログラムで得られるスキルを定量化することを目的に「身についたSDGsスキル」について調査をしました。活動に必要なと考えられるスキルやマインドに関する12項目から、特に身についたと思うスキルを3つ選んでもらいました。特に回答が多かったのは、「未来デザイン」「情報収集・伝達力」「探究心」の3つでした。今回の小論文のテーマ「実現したい理想の社会」であったことから、未来についてワークショップ等を通して考える機会が多かったことや、小論文作成やプレゼンに励んだことで、情報収集やアイデアを伝える力が身についたと感じられたと考えられます。

### 未来デザイン



楽しみながら、柔軟な発想により、実現のために論理的な思考とシステムを創ることができる

### 情報収集・伝達力



活用状況に応じた情報収集及び、適切な処理を行い、その情報を組織内で共有し全員が基本知識として体系化できる

### 探究心

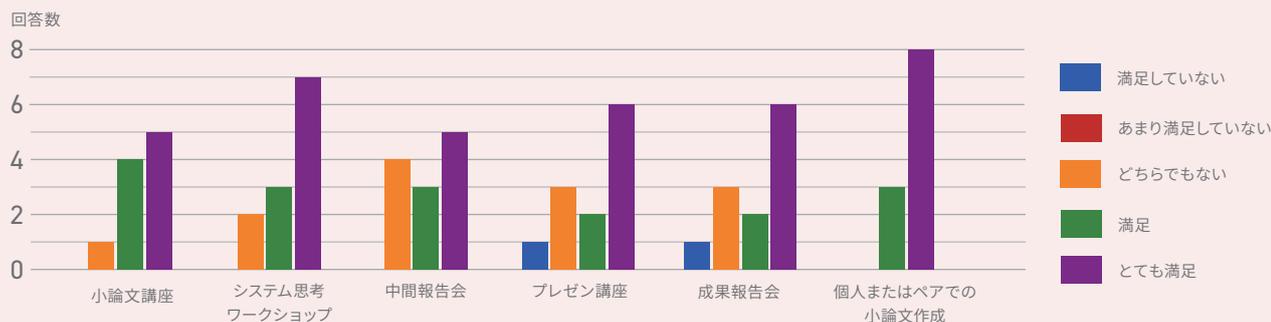


自分の関心や強みや弱みを理解し伸ばすことができる

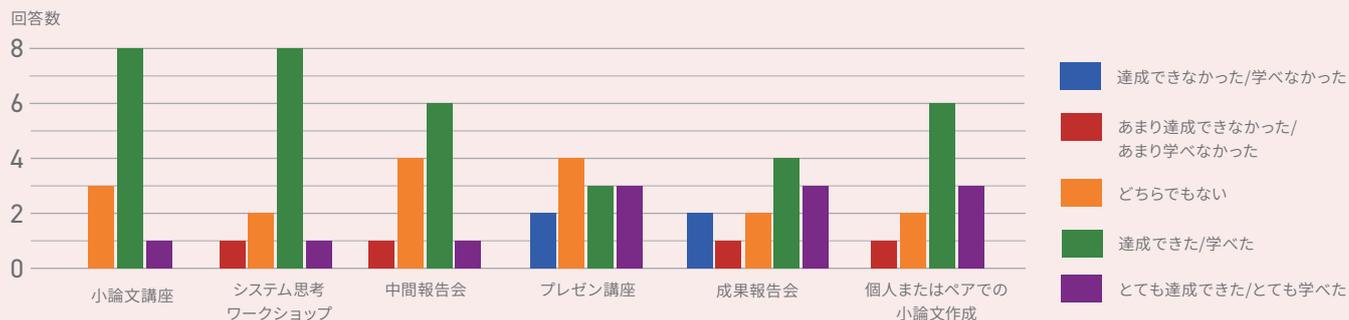
## レクチャー・活動の満足度調査

小論文講座、システム思考ワークショップ、中間発表会、プレゼン講座、成果発表会、各個人またはペアでの小論文作成、それぞれのフェーズでの《満足度》《達成度・習熟度》についてアンケートを行いました。

### 満足度



### 達成度・習熟度



# 受講者の声

プログラムを受講した生徒・学生の実際の声をいくつか抜粋してご紹介します。

## 高校生より

小論文を書いたのが初めてだったので、なにもかも書き方などから分からなかったのですが、分かりやすく教えていただきとても勉強になりました。サステナブルな未来へなど今までそこまで考えて来なかったので今回とても良い経験になりました。これからもさらに調べたりSDGsについて考えていきたいと思います。

プレゼン講座や小論文講座では今回だけでなく、将来の役に立つようなものがたくさんあり、自分自身の成長を実感することができました。成果報告会でも、自分では考えつかない、はっとするようなアイデアを聞き、視野を広げることができ、自分自身を見つめる良い機会になりました。

今回このBoot Campに参加させていただいて改めて自分が改善していかなければいけない点や、今まで気がついていなかった部分をたくさん発見することが出来参加して良かったと感じました。この経験をこれからの女性学にかかしていきたいと思います。

## 大学生より

1回生と団体活動を振り返りながら、今後のことを考えていくために論文にまとめていく作業ができたので論文書く作業はやりがいがありました。また、高校生と定期的に連絡を取って進捗管理をしていましたが、毎回成長がみて取れてとても楽しかったです。

実現したい未来についてアイデアを出して小論文を書くための講座があったことで、学びもたくさんありました。しかし、高校生と連絡を取ってサポートすることが難しい場面も多々あり、十分なサポートができなかったのではないかと感じています。

文章に自分のアイデアをまとめるのが、思っていた以上に難しいことに気づきました。学んだことを生かして、今後の活動に生かしていきたいと思いました。

# 講評



小論文講座 担当講師

山中 司 氏(立命館大学生命科学部教授)

今回の取り組みでは、高校生の皆さんは大学生の皆さんと協働し取り組んでもらいました。皆さんとても素晴らしい成果をおさめられたと思います。

もちろん高校生の皆さんにとって、要求水準が高いと思われたところもあったかと思いますが、まさに”learning by doing”、実際に取り組む中で多くが学べたと思いますし、最終的に何とかなったという経験を持たれたと思います。このような挑戦を続けることで、皆さんの様々な能力は大いに伸び、高められます。課題点が残ったとしても、それは当然で、是非次に活かしてもらえればと思います。挑戦し続けること、行動し続けることを忘れず、これからも大いに頑張ってください。



群馬県立館林女子高等学校 校長  
長谷川 充 氏

今回のSDGs Boot Campは、コロナウイルス感染拡大防止のため、オンラインを駆使しての取り組みとなりました。計画を聞いたときは、オンラインで十分な成果が上げられるのか心配されました。しかし、オンラインでの様々な講座は、対面での講演会や一斉指導では実現できない、大学のゼミに参加しているような、オンラインならではの指導の可能性を感じられました。参加者にとって、平素の授業では得られることのできない経験を通して、より深い学びが得られたと実感しています。ご指導をいただいた立命館大学生命科学部教授山中司様、本校女性学アドバイザー上田隼也様、立命館大学Sustainable Week 実行委員会の皆様に、この場をお借りして感謝申し上げます。

## おわりに

私たち立命館大学Sustainable Week実行委員会のメンバーにとっても小論文を書くというプロジェクトは初めての経験でした。しかし、高校生と一緒に書くことで大学生らしい文章を書かないといけないと少しプレッシャーを感じることもありました。大学生でもあまり経験のない「小論文を書く」ということにチャレンジした高校生の皆さんを心から尊敬します。

私たち大学生は、コロナ禍でキャンパスに行くことも減り、課外活動を制限され、「何もしない方がいいんじゃないか」と諦めそうになることもありました。そんな中でも、自分がなにかにチャレンジをするという行動がこれからの未来を作っていくと信じています。

今回、小論文にチャレンジすることで見えてきた課題として「小論文のテーマを探す」活動の必要性です。今年12月に実施する館林市や群馬県のフィールドワークに館林女子高の皆さんと一緒に取り組むことで学びをつなげていきたいと思います。引き続き頑張っていきますので、変わらぬご支援やご協力をよろしくお願いいたします。

立命館大学 Sustainable Week 実行委員会

2020年度委員長

豊田 真彩

